

## D. H. ロレンス : *The Crucifix across the Mountains* の文体と構造 (2)

川崎医療短期大学 教養部

清水 雅 子

(昭和58年9月10日受理)

### The Style and Structure of D. H. Lawrence's *The Crucifix across the Mountains*

Masako SHIMIZU

Department of General Education, Kawasaki College of Allied Health Professions

Kurashiki 701-01 Japan

(Received on Sep. 10, 1983)

**Key words :** 文における並列の文体効果  
語彙と文体効果

#### 概 要

D. H. ロレンスの作家活動初期における紀行文, *The Crucifix across the Mountains* の文体特徴を把握するために, 前稿に続いて, 文構造と語彙が文体に及ぼす効果を考察する。前稿で明らかにされたように, 文構造において重要な役割を果たしている punctuation を, 本稿では parataxis (並列法) の視点からとらえ, 素朴で原始的な構造の並列が, 抽象的な語彙と相まって, 緩慢な文構造にリズムを生じさせ, 直截で緊張した, しかも抽象的な文体効果を生ずることを論ずる。

D. H. ロレンスの作家活動初期における紀行文 *The Crucifix across the Mountains* (1916) の文体特徴を明らかにするために, 前稿に続いて文構造と語彙が文体に及ぼす効果を考察する。

前稿の punctuation の数量化からも, パラグラフ構造における効果からも明らかのように, punctuation はこの紀行文において重要なウェイトを占めている。本稿では, まず punctuation の役割を parataxis (並列法) の視点から考察し, 第2に, 十字架像と, そこに集約された「生」と「死」の表現の中に用いられている語彙が文体的にどのような効果をもたらしているかを考える。

前稿、表 3<sup>2)</sup> が示すように、総センテンス数 257、総語数 4574 に punctuation 総数 473 が占める割合は高く、その中でもコンマ数 464 は圧倒的に多い。コンマが文脈において使用されているのは、語と語の並列、文接続（等位接続・従属接続共）そして、文の並列における場合である。特に並列文 30 文中、完全並列文 21 文という数字が示すように、完全並列文はこの作品の文構造のひとつの特徴となっている。

文とは、あるまとまった思想感情を表現するひとつの単位であり、文学作品においては多くの場合、数個の内容上連絡のある単文を連結してひとつの文とみなされる。<sup>3)</sup> その際、文の連結の仕方に compound sentence と complex sentence と 2 種類あり、前者は coordination（並列）、後者は subordination（従属）の関係にある。複雑な構文は coordination から発達してきたものであって、その中でも parataxis は文構造からみて最も原始的な形態の構文であり、連絡された単文はおのおのが独立し、互いに同位的な性格をもつ。<sup>4)</sup>

前稿において指摘したように、ロレンスは短文の多い文章中、珍しく 105 語という長文においても、punctuation によってセンテンスを区切り、「接読詞ゼロの強み」としての並列を効果的に用いて intensive な文体効果をあげている。<sup>5)</sup>

そこで *The Crucifix across the Mountains* における完全並列文の文例を具体的にみると、以下のように 3 つに分類されるであろう。

- (1) 比較的長いセンテンス中の並列
- (2) パラグラフにおける帰結の性格をもつ並列
- (3) 風景描写、十字架像描写における並列

ここで、おのおのの文例を引用し、その文体効果をみることにする。

- (1) For overhead there is always the strange radiance of the mountains, there is the mystery of the icy river rushing through its pink shoals into the darkness of the pine-woods, there is always the faint tang of ice on the air, and the rush of hoarse sounding water.<sup>6)</sup>

上記例は、there is …… で始まる homogeneous な内容の 3 文が並列で反復される。十字架像に対立する not-being としてアルプス山頂に永遠に存在する雪と氷を文字化する一例であり、極めて symbolical な存在が、文体的には反復文の並列と名詞の多用によって、フォルティッシモに表現されている。

次の例は、短文の多いこの作品中、異例の長文における並列例である。

It is the same at all times, whether it is the mowing with the scythe on the hill-slopes, or hewing the timber, or steering the raft down on the river which is all effervescent with ice; whether it is drinking in the Gasthaus, or making love, or play-

ing some mummer's part, or hating steadily and cruelly, or whether it is kneeling in spell-bound subjection in the incense-filled church, or walking in the strange, dark, subject-procession to bless the fields, or cutting the young birch trees for the feast of Frohenleichnam, it is always the same, the dark, powerful mystic, sensuous experience is the whole of him, he is mindless and bound within the absoluteness of the great icy not-being which holds good for ever, and is supreme.<sup>7)</sup>

It is the same at all times と it is always the same との反復, whether it is …… の反復, ,or の反復による looseな文構造にありながら, 並列によって monotonous な文体になる危険性がさけられ, the great icy not-being の本質がバランスのある文体に具象化されている。

(2) 上記分類中,(2)が最も思想性を含み, この紀行文の性格を特徴づけている並列と考えられる。枯れたけしの花を足もとに置いた十字架像描写の並列例。

... His soul was set, his will was fixed. He was himself, let his circumstances be what they would, his life fixed down.<sup>8)</sup>

十字架像の描写が続いたあとで, 突然のように上記の並列文で帰結され, この紀行文 abstract な文体を性格づけている。

次の引用は, 十字架像の原型であるババリア地方の人々の描写における帰結文である。この個所の描写は, 特に並列が多く, この最後の並列は特に強い文体効果をもっているわけではないが, やはり前例と同じく, abstract な語彙と共に感情の高まりが適格に表現されていると言えよう。

赤いフランネルを着た小さなキリスト像描写の中の並列を含む文例:

The little brooding Christ knows this . . . . It is not a question of living or not-living. It is a question of being — to be or not to be. To persist or not persist, that is not the question; neither is it to endure or not to endure. The issue, is it eternal not-being? If not, what, then, is being? For overhead the eternal radiance of the snow gleams unfailing, it receives the efflorescence of all life and is unchanged, the issue is bright and immortal, the snowy not-being. What, then, is being?<sup>9)</sup>

上記は紀行文中, 最も難解で最も哲学的な表現に富むパラグラフからの引用である。このキリスト像描写には, 生と死の葛藤, 人間存在の本質が抽象的な語彙と, 簡潔すぎるほどの文構造, そして what, then, is being? の反復によって極めて凝縮された文体で表明されている。

最後の引用は, 馬を引いた男がキリスト像の前を恐怖心を抱きながら通っていく描写の帰結文である。

Christ is the Deathly One, He is Death incarnate.<sup>10)</sup>

上記は、一種の afterthought としての反復表現であり、ダメ押しの性格をもち、ロレンスの文章には散見される homogeneous な内容の並列例である。

(3) 風景描写 キリスト描写における並列の例。

The pass is gloomy and damp, the water roars unceasingly, till it is almost like a constant pain.<sup>11)</sup>

The mountain are dark overhead, the water roars in the gloom below.<sup>12)</sup>

Again, another little crude picture fastened to a rock : a tree, falling on man's leg, smashes it like a stalk, while the blood flies up.<sup>13)</sup>

For they are bloodshot till the whites are scarlet, the iris is purpled.<sup>14)</sup>

He is conquered, beaten, broken, his body is a mass of torture, an unthinkable shame!<sup>15)</sup>

以上の例は全て、純粋な単文と単文との並列ではなく、複文と単文との組み合わせであったり、語の並列を含む文との組み合わせであったりしており、文構造は短文ながら、かなり変化をもった文体であり、並列のもつ直截さと相乗して、風景描写あるいは十字架描写あるいは十字架像描写が flat になる危険をまぬがれている。

以上、並列を含む表現の文体効果を概観してきたように、*The Crucifix across the Mountains* は短文で構成されていることに加えて、並列文が多く用いられているという事実が、作品全体を簡潔でしかも、フォルティッシモな文体に仕上げていていると考えられる。

見方を変えれば、並列においては、文と文の結合が事柄の進行や心理的な経過にまかされることが多いので、<sup>16)</sup> natural な文構造をもちながらも、前文と後文の間に飛躍があるかにみえる場合もあり、文体的には abstract な印象を与えることもありうる。しかし、ロレンスの場合は、上記(2)の例文でみたように思想性の高い抽象的な表現を含む並列であっても、homogeneous な反復の場合が多く、abstract な文体は、並列からよりも、語彙によって生じていると考えられる。

最後に、語彙が文体に及ぼす効果をみる。十字架像描写、前章に触れた「生」を具象化する百姓、及びババリア地方の人々の描写、死を象徴する雪と氷の世界の描写は、この紀行文の中心を成している。そのおのおのにおいて、比較的頻度の高い語彙を拾い出し、語彙がどのような効果を生じているかを考える。

- (1) 百姓, ババリア地方の人々の描写における語彙。

silent; physical sensation; intoxicating; blood heat; blood sleep; the heat of physical sensation; sensuous experience; instinctive fullness; rapt; symbolic utterance; physical heat; blood playing

- (2) 十字架像の描写における語彙。

mystic; resistance; stubbornly; resisted unmoving; no movement; fixed; consummation of life and death; did not yield;

- (3) アルプス山頂の雪と氷の描写における語彙。

unnaturally bright; rare; unearthly; strange radiance; mystery of the icy river; hoarse-sounding water; transcendent; radiance of negation; negative radiance of the snow; changeless not-being; eternal, unthinkable not-being; changeless brilliance; everlasting snow

以上の語彙使用から, 「生」を表現する語彙には, blood, sensual, physical, heat等のロレンスの常套語が反復され, 「生」とは, 血の脈々と流れる肉体の躍動, 温かさ, 充足を意味することが明らかである。

この「生」に対する存在として表現されている「雪」の描写には「生」の躍動を伝える百姓の描写における語彙とは対照的に, un-, negation, not-, less 等の否定語が用いられている。それらは「死」の象徴としての具象化であり, 「死」がもつ固さ, 冷ややかな感覚, 無に迫いこもうとする厳しさを感じさせ, 文体を abstract なものになっていると言えよう。雪に象徴される「解体と崩壊」は, この紀行文から発展して, 同時期に書かれた小説 *Women in Love* (1920) の最終章, 雪の中での Gerald の死に見事に具象化されている。

十字架像描写においては, 「生」と「死」を表す語彙が交互に現れ, 「死」の永遠なる輝きに生き生きした「生」の躍動と温かみを閉じ込められ, なおも抵抗し, 苦悩するありさまが, resistance, stubbornly, no movement, did not yield 等の語に集約されている。

このように, ロレンスが十字架像に託して表現しようとした事柄は, 人間存在の本質は何かという問いかけであり, 答を求めれば必ずや, 生と死の間で生ずる葛藤に苦しまなければならない人間の運命であると考えられる。従って十字架像描写において, 語彙は思想を内包し, 抽象的で難解となり, 文体的に abstract な, 更に symbolical な効果を生じていると言えるのである。

以上, 本稿においては, まず punctuation が文体に効果を与えていると考えられる並列を中心に文構造を, 次に語彙が文体に及ぼす効果を考察してきた。

前稿における coordinate conjunction の用法と同様, parataxis の文構造は natural であり simple である。それを, ロレンスのような, 思想と文章化の進行が同時に行われるタイプの作家が用いるのは, 当然の理であると思われる。しかし, *The Crucifix across the*

*Mountains* においては、素朴で原始的な並列の文構造は、抽象的で難解な語の使用と相まって、緩慢な流れの中にリズムを生じさせ、表現内容と一致しながら、direct に、ときには、tight で abstract に変化に富んだ文体効果を生じている。この事実が、*The Crucifix across the Mountains* を紀行文の限界を超えた思想性の高い散文にふさわしい文体に仕上げていると考えられる。

## 注

- 1) M. Shimizu, *The Style and Structure of D. H. Lawrence's The Crucifix across the Mountains* (Kurashiki : Bulletin of Kawasaki College of Allied Health Professions No. 2, 1982)
- 2) Ibid., p. 112.
- 3) H. Sweet, *New English Grammar* (Oxford : Clarendon Press, 1968) p. 155.  
G. O. Curme, *Syntax* (Tokyo : Maruzen, 1972) p. 1.  
O. Jespersen, *Philosophy of Grammar* (New York : Henry Holt, 1924), p. 307.
- 4) 古川尚雄, 英独比較語学 (広島 : 溪水社, 1982) p. 321.
- 5) M. Shimizu, 前掲
- 6) D. H. Lawrence, *The Twilight in Italy* (London : Heinemann, 1957) p. 5.
- 7) Ibid., pp. 7-8.
- 8) Ibid., p. 4.
- 9) Ibid., p. 8.
- 10) Ibid., p. 10.
- 11) Ibid., pp. 9-10.
- 12) Ibid., p. 10.
- 13) Ibid., p. 11.
- 14) Ibid., p. 13.
- 15) Ibid., p. 13.
- 16) 古川尚雄, 前掲